

聖霊降臨後第21主日(特定27) 2011/11/6
聖マタイ福音書第25章1節～13節
於:聖パウロ教会 司祭 山口千寿

「目を覚ましていなさい。あなたがたは、その日、その時を知らないのだから。」今日の福音書の結びのみ言葉です。「その日、その時」というのは、イエスさまが再び来られる時のことです。再臨の時、それはこの世の終末が到来するときです。裁きの時、そして、救いが完成するときです。

初代の教会の信徒は、イエスさまの再臨が、明日にでも起こることを期待して、待ち望んでいました。「主よ、来てください。マラナ・タ」という祈りは、初代教会の人々の熱い願いでした。再臨が間近に迫っていると信じたからこそ、幾多の迫害や困難にも耐えることができたのでした。もうしばらく苦難を我慢すれば、究極的な救いが実現すると期待しました。

しかし、時が経つにつれ、待ち望んだようには、再臨がなかなか実現しないことを認めざるを得なくなりました。「あなたがたは、その日、その時を知らない」というイエスさまのみ言葉を、そこで、思い起こしたのです。それと共に、改めて再臨の信仰について吟味し直す必要に迫られました。新しく理解し直すことを促されるようになったのです。今日の福音書は、この問題について取り扱っています。

ところで11月に入り、教会暦の終わりが近づいてきました。次の次の主日は降臨節前主日ですから、1年の最終主日を迎えることとなります。これから降臨節前主日に向かって、終末への備えが次第に強調されていくこととなります。このことは、降臨節のテーマとも重なってくることです。

先程、昇階唱として歌った聖歌58番は、今日の福音書に基づいて作られた聖歌です。この聖歌は、降臨節の聖歌の中に分類されています。そのことを見ても、今日の福音書のテーマが、降臨節のそれと重なっていることが分かると思います。

さて、今日の福音書は、「10人のおとめのたとえ」と呼ばれているたとえ話です。イエスさまは、このたとえを通して、天の国がどのようなものであるかを教え

ようとされました。わたしたちが、神さまの支配のもとに生きるためには、どのようなあり方をしなければならないかを教えようとしておられるのです。

たとえば、花婿の到着を待つ10人のおとめたちの姿を描いています。当時のユダヤの結婚式は、通常、夕方に始められました。婚宴に先立って、花婿が花嫁を迎えに行きます。その時に、友だちがたいまつを手にして花婿に付き添っていきます。花婿が花嫁の家にやって来ると、花嫁の家で待機していた花嫁の女友だちが、たいまつを手にして迎えます。そして今度は花婿花嫁共々、婚宴の行われる花婿の家にまで、盛大な行列を作って向かいます。

ところが、婚宴の席への到着が予定よりも遅れることが、決して珍しくはなかったようです。その理由は、花婿と花嫁の親族たちの間に交渉ごとがあって、それに時間をとられることが間々あったからです。何を交渉したかということ、何らかの理由で結婚が解消される場合に、花嫁に支払われる金額について、話し合いがもたれたためです。

結婚式の当日に、結婚が解消された時のことを話し合うというのは、わたしたちには、縁起でもないと感じられます。しかし、ユダヤの花嫁の親族にとっては、この花嫁がどれほど大切な娘であるか、そのことを強調したかったのでしょう。そのため、金額を出来るだけ高くしようとして、その交渉に時間がかかったというわけです。そんなこともあったのでしょう。（『主日の福音A年』）

このたとえでは、理由は述べられていませんが、花婿の到着が遅れてしまいます。それで、今か今かと待ちわびていたおとめたちは、待ちくたびれて、みんな眠りこけてしまいます。真夜中になって、花婿の到着が、突如、告げられます。

おとめたちは、慌てて眼を覚まし、たいまつに火を点そうとするのですが、5人の賢いおとめたちは、予備の油を用意していたために、花婿を迎えて婚宴の席に入っていくことができました。しかし、残りの5人のおとめたちは、その用意がなくて、油を買いに行っている間に婚宴の席の戸が閉じられ、閉め出されてしまったというのです。

しかも、後から戸をたたいて、「ご主人様、開けて下さい」と叫び頼んでも、「お前たちのことなど知らない」と、冷たく言い放つ声が返ってくるばかりなのです。

油を用意していたか否かが、婚宴に迎え入れられるか、それとも閉め出されるかの決定的な分かれ目となるということです。婚宴は天の国に於ける宴です。そこに連なるためには、油を用意していなければなりません。そして、その油というのは、人から分けてもらえるようなものではないのです。自分の責任においてしか点すことの出来ないたいまつ火、その油を用意しているか否かが問われているのです。その油とは、一体なんなのでしょうか。何を指しているのでしょうか。

このたとえの「花婿」というのは、イエスさまのことを指していることは明らかです。花婿であるイエスさまは、わたしたちが眠りこけているような時に、突然、やって来られるのです。しかも、わたしたちの目には、それがイエスさまの到来だとは気付かないような仕方でもって来られるのです。だから、わたしたちは、しばしばイエスさまとの出会いのチャンスを見逃してしまうのです。

話は変わりますが、3月11日の大地震の後、今度は首都圏直下型の地震の可能性や、東海地震、東南海地震、そして南海地震と、それらが起こる可能性について、マスコミが関心をもって報道した時期がありました。それがいつ起こるか、確実に予測することはできません。しかし、いつか必ず起こることだけは確かであると、誰もが信じています。それが何時、起こるか分からない。だけれども、必ず起こる。そのようなことがあるのだ。それを間近に経験した出来事が3月11日であったと思います。未曾有の出来事を経たことによって、わたしたちは終末を身近な出来事として捉えることが出来るようになったのではないのでしょうか。終末の到来を自分の問題として受け止めることが出来る、受け止めざるを得なくなったのではないか。言い換えれば、わたしたちの生き方、在り方に対して、根源的にチャレンジするような出来事が3月11日であったと思います。

そうだとすれば、わたしたちは今までの生き方を、そのまま維持し続けることはできなくなるはずで、自分の生き方を振り返って、新しい生き方へと、一歩、踏

み出さなければならない。自分の生き方を根本的に変えなければならない。そのためには、大変な勇気とエネルギーを必要とします。そのため、あれだけの出来事があったにも拘わらず、新たな一步を踏み出すことをしないで、今までの在り方に留まろうとしてしまいます。その方がたやすいからです。そのようにして、折角のチャレンジを生かすことが出来ずに終わってしまうのです。

チャレンジを受けるということは、自分の生活が問われることです。自分自身の今までの在り方が、それでいいのかと問いを突き付けられることです。自ら覆い隠していたものが明らかにされるのです。見させられるのです。自分のそれまでの生活の決算を迫られることです。そこでは、誰かに責任を転嫁することも出来ないし、誰かに依存することも出来ません。自分で答を出さなければなりません。

そうなったときに、自らの生活の在り方に変革が迫られるのです。その変革を促す力、それは聖霊の働きです。

コリントの信徒への第1の手紙の中に、次のような御言葉があります。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです」(12:3)。洗礼を受けてクリスチャンとなり、生き方が変わったのは、聖霊の働きによるのだということを意味しています。その聖霊の火を点し続けることによって、イエスさまをお迎えするのです。

初めに申しましたが、今日の福音書の最後に、「眼を覚ましていなさい」という警告の御言葉が記されています。眼を覚ましているというのは、年がら年中緊張して神経をピリピリさせていることではありません。普段は眠りこけていてもいいのです。しかし、いざというとき、イエスさまがお出で下さるとき、開かれた目をもってお迎えしなさい、見逃すことのないよう気をつけなさい、ということでありましょう。

マタイ福音書は、この後、終わりの日の裁きについて述べています(25:31~46)。この所は、降臨節前主日の福音書ですが、今年は収穫感謝の聖書日課を用い

るので、この箇所については読むことをしません。それで、少しだけ触れておきたいと思います。

イエスさまが裁き主と来られるときに、どのようなことが問われるのか、ここには記されています。それは、イエスさまの兄弟である最も小さい者と呼ばれている人たち、具体的には、飢えている人、渴いている人、旅人、裸で着る衣服を持たない人、病気の人、牢に入れられている人が上げられています、これらの人々に必要なものを与え、訪ねてお世話をしたか否かが、祝福にあずかるのか呪いを受けることになるのかの違いを生むことになると指摘されています。何故なら、これらの困難な状態にある最も小さい人々への憐れみの業が、それはとりもなおさず、イエスさまに対してしたことになるからだということです。

イエスさまをお迎えするという事は、毎日の生活の中で、わたしたちがどのように振る舞うかということと深く関わるのです。それは、わたしたちが立っている立場が何処なのかを問われることであり、その変革が求められることでもあるのです。

日々の生活の中に訪れてくださるイエスさまによって、わたしたちの生活が新たにされるよう、今日は祈り求めたいと思います。